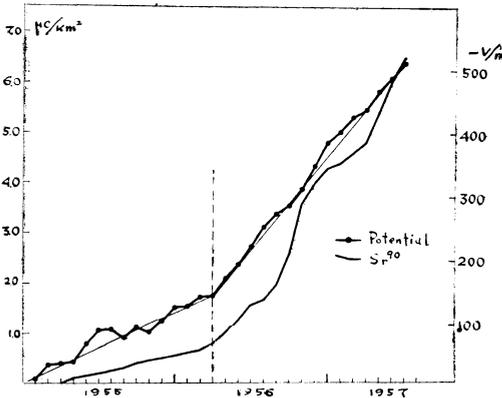


られるが、この場合には空間電荷がもっとも影響をうけるであろうし、又電位傾度の日変化の様子なども変化すると思われるのであるが、記録からはそのような変化は見出されなかったのでこの原因は考えにくい。

2. 太陽活動などのように大規模な変化によるもの

太陽活動と気象との関係は色々述べられており、気象状態が変化すれば気象電気も変化するのである。三崎、仁井田氏等も指摘しているように太陽活動と電位傾度とは関係があるので1950～1953年頃の減少はそのような原因で説明されるとしても1954年以後の変化は説明されない。



第2図

3. イオン生成率の変化

イオン生成率の測定は行なっていないので直接比較す

ることはできないが、Pierce も述べているように、最近核爆発実験による人工放射能の増加によりイオン生成率が増加したとするならば、Iで述べたような現象は定性的には説明つけられる。

そこで吾国での人工放射能と気象電気との関係を見るために、 Sr^{90} と電位傾度とをくらべてみた。第2図は、日本における1955年3月より Sr^{90} の累積量と電位傾度の累加積分値を示した。ここでの電位傾度の値は季節変化をのぞくために1930—1940の平均値を差引いたものを取扱った。この図からも人工放射能と電位傾度との間に明瞭な関係があることがうかがえる。即ち、 Sr^{90} が急増した1956年3月より、電位傾度も平均して約20volt/mだけ急減している。

なお、女満別でも電位傾度の年平均値は柿岡と同様に最近、減少しているので測定のエラーでないことはたしかである。

むすび

最近の柿岡における気象要素の年変化は人工放射能の増加により一応定性的には説明されるけれど、

1. 地面より ionosphere に至る気柱電気抵抗
2. 世界各地における気象電気要素
3. 人工放射能とイオン生成率の関係、及びそれらの変化

を知ることによりさらに明確にされねばならないと思う。

気象の英語(5)

有住直介

5. cloud, fog, haze, および mist

気象学上これらがどう違うかはよく御存じのことと思う。観測法によると

cloud 雲 雲の下面は地表より高いところにある。雲層の下面が地表に接すると fog と呼ばれる。

fog 霧 小さい水滴が浮んでいて1kmより遠くが見えないもの。湿って冷たく感ずる。

haze 煙霧 かわいた小さなほこりが浮遊してかすんで見えるもの。

mist もや fogよりさらに小さい水滴が浮んでいて1km以上も見える。湿っぽく感じない。灰色っぽく見える。

これらの言葉を比喩的に使う場合でも、違いがある。cloudは空想を思わせ、fogとhazeは当惑を意味し、mistは感傷を誘い、涙を暗示する。

His mind is in the clouds. 彼は空想に耽っている。

To go around in a fog (haze). 当惑する。

A mist in her eyes. 彼女の眼には涙。

日本語でも五里霧中では当惑を表わし、雲にのる、とか雲居とかは空想的である。また、夕もや、夕がすみなども大変感傷を誘う言葉である。自然現象の見方は案外西洋でも東洋でも同じなのかも知れないと思うと面白い。話はそれるがmistの訳には、「かすみ」を当てないで、どうして「もや」を当てたのであろうか。「かすみ」は春の季語なので、一般用語としては避けたのかも知れないと想像しているがどうであらうか？